

ガッカンプログラム 初級コース 第1回 解説

* こちらは、解説の音声ファイルの文字起こしになります。

この度は、ガッカンプログラムにお申込みいただきありがとうございます。
ガッカンプログラムは、小学生の地頭を鍛えるというコンセプトで指導を行う学習塾「ガッカン」のプログラムをみなさまにそのままお届けしています。

ガッカンは他の塾と一線を画したプログラムであり、それをそのまま全て公開するということには反対の声もありました。しかし、実際、ガッカンに通えない方々からもガッカンの指導を受けたいという声をいただいておりましたので、公開することといたしました。

お父さんやお母さん、周りの大人の方が先生役となり、お子さんと一緒に取り組んでいただくようお願いいたします。

教材と解答だけでは、当然先生役は難しいと思いますので、こちらの解説と台本をお届けします。

こちらの解説を良く読んで、台本を元にお子さんと楽しく取り組んでいただければ、ご自宅にしながらガッカンの指導効果を受けることができます。

ガッカンはそもそも、楽しく行うことをモットーとしておりますので、無理にやるというよりは、お子さんとのコミュニケーションを楽しみながら行っていただけると嬉しいです。

すみません、挨拶が遅れました。

ガッカンプログラム、ナビゲーターの田苗真也と申します。

ガッカンプログラムの開発者、佐藤壮夫に代わって、みなさんに使い方や理論背景の解説をして参りますので、今後ともよろしく願いいたします。

さて、教材の準備はよろしいですか。

お手持ちの教材に沿って説明をしていきますので、

まだ準備ができていない方は印刷してから、この先をお聞きください。

準備がまだの方は一度ストップして、準備ができたなら再開するようにお願いします。

それでは、初級コース第1回のやり方を説明いたします。

まず、お子さん用の教材と解答、大人用の台本があることを確認してください。

お子さん用の教材は7枚、解答は5枚、台本は8ページです。

1 ページ目：スラッシュ

まず、教材の1 ページ目を見てください。こちらが初級コースの基本となるトレーニングです。ぼくらが「スラッシュ」・「アロー」と呼ぶ2つのトレーニングができます。

「スラッシュ」は文を「意味のかたまり」で切るというトレーニングです。

(1)の「ぼくがかいた」という文であれば、「ぼくが」のところで切れますね。懐かしい言葉で言うと「文節」に近いものです。

文を理解するのが苦手な児童は「単語を拾うように読んでいく読み方」をしてしまっています。文の中から知っている言葉を見て、それを繋げて想像して分かったつもりになってしまうのです。

そうならないように、「意味のかたまり」で捉えていくという習慣、癖付けをしていく必要があります。

まずは、台本にもある通り、「ごりらがたべた」という文を紙に書いて、

「日本語は、切れ目があるんだよ。この文だったら、『ごりらが』で切れるよね。」
というように話をして、「ごりらが | たべた」のように意味のかたまりで切ることを実演してもらえれば何となく理解できると思います。

もともと言語理解は人間に本能的に備わっている力ですので、この「何となく」が重要になります。

お子さんの手が止まって長い間考え込むようであれば、それぞれの文に何本の線が引けるかを教えてあげても結構です。(1)と(2)の「ぼくがかいた。」は1本、(3)以降は2本ですね。

それでも、手が動かない場合、

「間違えてもいいから、切れそうなところで線を引いてごらん。」

と優しく促してください。

もし、それでも手が動かない場合、

最後の手段としては、初回なので(1)や(2)を教えてしまっても結構です。

「この文は、『ぼくが かいた』だよ。」

のように、「が」にアクセントをつけながら、「が」と「か」に間を置くことで理解させると良いでしょう。

そのようにして、5問を「意味のかたまり」で切らせていきます。

気をつけてほしいのは、「間違えていても途中で教えない」ということです。5問全部終わってから答え合わせをしてください。

今回は「が」の直後で切れることを学んでほしいので、「が」の直後に線を引けていたら、

「すばらしい、『が』のところでしっかり切れているね。」

と褒めてあげてください。

間違えていた部分については、

「この文は線の引き方が違うみたいだから、もう一度考えてみて。」

というように、答えを言うのではなく、お子さん自身に気づかせるような声かけをしても

らえると最高です。

5文を正しく切れたら、「スラッシュ」のトレーニングは終わりです。

1 ページ目：アロー（矢印）

それでは、次のトレーニングです。アロー（矢印）と呼ばれるトレーニングになります。今、5つの文を「意味のかたまり」に切ってもらいましたが、それぞれの「意味のかたまり」は別の「意味のかたまり」に繋がります。

3文目で説明すると、

「きれいな | はなが | さきました。」

という文の「きれいな」は、「はなが」に繋がるのであって、「さきました」には繋がりません。このように「意味のかたまり」が別のかたまりに繋がることで、「花がきれいで あること」を伝えているのです。

これから行うトレーニングは、それぞれの「意味のかたまり」がどの「意味のかたまり」に繋がるかを考えるトレーニングです。たった今切ってもらった文を使って行います。

まずは1文目の「ぼくが | かいた。」を使います。「『ぼくが』 どうしたの（何をしたの）？」とたずねると、「かいた！」という答えが返ってくると思うので、そうしたら、「ぼくが」から「かいた」に向けて、矢印を書いてください。もし、答えが返ってこなければ、

「『ぼくが』は『かいた』に繋がるよ。」

と言いながら矢印を書いてしまってください。

そして、

「『ぼくが』は『かいた』に繋がるね。この調子で、他の文も「意味のかたまり」からも矢印を書いてみよう。」

というように声をかけてもらえれば良いと思います。ちなみに、文の最後の「意味のかたまり」は述語と呼ばれる役割で、どの「意味のかたまり」にも繋がりません。

今回は「～が」という「意味のかたまり」が「どうする・どうした」「なんだ・どんなだ」という言葉に繋がることを学んでほしいので、「～が」の「意味のかたまり」がどこに繋がるかをしっかり考えさせてください。その時、お子さんが迷うようであれば、「ぼくがどうしたの？」「にがおえがどうなの？」というような声かけをして「どうする・どうした」「なんだ・どんなだ」に繋がることを意識できるようにしてください。

お子さんが迷ったときの声かけの例を以下に紹介します。

- (1) 「ぼくがどうしたの？」
- (2) 「にがおえがどうなの？」
- (3) 「きれいな何？」「はながどうしたの？」
- (4) 「いぬがどうするの？」「ごはんをどうするの？」
- (5) 「この何？」「いぬが何？」

このような声かけをして意味のつながりを意識させてください。

アローまでできたら、1 ページ目は終わりです。スラッシュとアローは理解力の基礎となるので、今後も続けていきます。基本的なやり方は同じなので、次回以降もこのようにお願いいたします。

2 ページ目：スラッシュ・アロー

2 ページ目は 1 ページ目を少し難しくしたものです。お子さんが難しいと感じる場合はゆっくりと進めてください。台本にもある通り、アローが難しい場合は飛ばしてもらっても構いません。スラッシュが問題なくできれば、アローにも取り組んでください。

スラッシュに取り組むときは、1 ページ目と同じように、

1. まずはヒントなしで「意味のかたまり」で切ってみる。
 2. 手が止まる場合は、それぞれの文で引ける線の数を教える。
- というように行ってください。

とにかく、繰り返していればできるようになりますので、「間違えても構わないから、とにかく感じるままに切ってみる」というくらいの軽い気持ちで取り組んでもらえると良いでしょう。

今回の 4 文の中で、悩みそうなのは (3) の「女の子の」と (4) の「場面によって」「かわっていきます」でしょう。(3) は「女性の子供」という意味ではないので「女の子」で 1 単語です。「女の」で切らないようにしましょう。(4) は「場面に」で切りたくなるかもしれませんが、そこで切ってしまうとその後の「よって」の意味が分からなくなります。「場面によって」で 1 つのかたまりです。また「かわっていきます」も「かわって」で切りたくなると思います。文節としては「かわって」で切りますので、正解にしてください構いません。ただ、この「いきます」は補助動詞というもので、本来の「行く」という意味が失われています。なので「いきます」だけでは「意味のかたまり」として弱く解釈できるので、ここでは切らず「かわっていきます」で 1 つのかたまりとするのが良いでしょう。

アローに関しては、声かけの例を挙げておきますので、お子さんが迷っていたら下の例を参考に声かけをしてください。

- (1) 「みちばたに、どうなの?」「はなが、どうなの?」
- (2) 「せっかく、どうしたの?」「はこんだ、何?」「たねを、どうするの?」「すの、何?」「そとに、どうするの?」
- (3) 「ゆたかは、どうしたの?」「女の子の、何?」「すがたを、どうしたの?」
- (4) 「場面によって、どうなるの?」「人物の、何?」「行動や、何?」「気持ちが、どうなるの?」

答えのように矢印を正確に書けるようになるのには時間がかかりますが、繰り返していくとできるようになりますので頑張ってください。

3 ページ目：ワーキングメモリ

3 ページ目は聴く力のトレーニングを行います。授業を理解できる児童と理解できない児童の差は「聴いた内容を頭の中にどれだけキープできるか」に現れます。先生の話があつという間に頭から抜けていってしまう児童がいる一方で、何時間も前の話を覚えていて全ての話を結び付けて理解できる児童もいます。後者の方が授業の理解度が高く、成績も良いのは当然です。

このトレーニングでは人の話を頭にキープする力を鍛えていきます。最初なので、やりやすい数字からやっていきましょう。後半は短い文になります。

解答の 3 枚目を見てください。ガツカンの教材をそのままお渡ししているのが最初の 3 行は、「他の人の迷惑になるので」と、複数人が一斉にやることを想定した説明書きになっています。お子さん一人に対して行う場合は台本を参考に進めてみてください。

数字を覚える問題が 3 問あります。1 問ごとに答え合わせをしていくとクイズのようになり楽しめると思います。

例えば、以下のように進めてみてください。

「はい、では 1 問目いきます。 2・9・8 (に・きゅう・はち)」

【20 秒待つ】

「はい、書いてください。」

【書き終わるのを待つ】

「できたかな。正解は、2・9・8 (に・きゅう・はち)」

(できていた場合)

「すばらしい、よくできたね！！」

(少し違う場所があった場合)

「いいね。ここは違うけど、他は完璧だね！その調子！」

(全く違った場合)

「いいよいよ、よく書けました。いくら間違えてもいいから、この調子で頑張ろう！」

ちなみに、3 問とも語呂合わせができる数字になっています。答え合わせが済んだ後に、

「2・9・8 は『にくや』とも読めるね。お肉屋さんだ。」

というような声かけをしていただくと、数字と文字を結びつけることを自然と学んでいきます。これは今後の数字への苦手意識を摘んでおく効果や数に対するの興味を増す効果があります。余裕があったら、言ってみてください。

3 問終わったら、短い文で行います。学校では言われたことを書き取るという練習をしません。児童が書き取るのは黒板に書かれた文字です。そのような環境ですので正確に聞き取る力は育ちにくいのが現状です。そして、正確に聞き取ることでできる児童とそうでない児童でおおきな学力差が生まれるのも事実です。この訓練では確実に聞き取ることに意識を置いていきましょう。

詳しいやり方は台本をご覧ください。できた部分を褒めつつ、間違いを指摘していきましょう。

4・5 ページ目：文の型

このページでは日本語の文の型を頭に染み付ける練習を行います。日本語には文の型があり、それに従って作文をしたり文を理解したりします。そのような文の型をマスターすることで理解力や表現力も高まっていきます。普段何気なく使っている文がどのような型なのか知ることによって自由自在に理解・表現できる幅が広がるので、是非とも繰り返していききたいトレーニングになります。

今回は、日本語の文で大きな役割を持っている主語・述語を意識して、「～が」と「～は」、「どうする」「どうした」を行っていきます。

自由に作ってもらって構いません。型が違った場合だけ直してあげてください。つまり「なにが」のところで「が」を使わなかったり、「どうした。」のところで「た」を使って過去の形にしなかったりした場合です。それ以外は、良くできたと褒めてあげるのが良いでしょう。

細かいやり方は台本をご覧ください。原則として、人間は他の人の使っている表現を真似ることによって表現を学んでいきます。なので、お子さんが困っているようであればどんどん具体例を出してあげてください。その上で、「他にある？」と聞いてあげるのが良いでしょう。そうすると、自分なりに考えて文を作れるはずですよ。

6 ページ目：文章題作図

6 ページ目は算数の文章題を理解するための訓練です。何となく出てきた数字を勝手に足したり引いたりして答えを出そうとする児童が非常に多いです。そのような解き方をしてしまうのは理解力が低いせいなので、最初に行ったスラッシュとアローが効果的です。さらに、スラッシュやアローで高めた理解力を元にしてしっかり文をイメージ化する習慣をつけられれば算数の文章題が得意になります。

今回は、文をしっかりイメージ化するために絵を描いていきましょう。

あくまでもイメージ化することが目的であってきれいな絵を描くことが目的ではありません。絵のうまさは全く気にしないでください。むしろ、文で書かれたことがきちんと絵で表現されているかを見てください。

皿があるか、ハンバーグの数が適切か、その辺りが間違っているようであれば、指摘をして描き加えさせてください。

そして、問題が解けたら、「絵を描くと分かりやすいね」と念を押しておき、今後の作図をする習慣の種を植えておいてもらいたいと思います。「絵を描くと分かりやすい」と本人が感じることで、図を描くモチベーションが高まるわけです。

7 ページ目：マス計算

最後はマス計算です。算数の基礎練習としてはメジャーですね。とにかく算数の計算はどんなに複雑な難しい計算でも細かい簡単な計算が合わさってできています。そのため、このようなシンプルな計算を繰り返してスピードと正確性を高めておくことが大切です。

可能であれば、多めに印刷して毎日でも取り組んでいただきたいところです。

タイムに関してですが、標準がどれくらいかはあえて申し上げません。現在のタイムではなく、速くなったこと自体を褒めてあげてください。「最初るときよりも 3 秒速くなったよ。」「今回は最初よりも 4 秒遅かったけど、次また頑張ろうね。」というような要領ですね。

マス計算を習慣づけるなら、何かとセットにするといいでしょう。晩御飯が終わったら、そのままマス計算をやる、晩御飯前に食卓に座ってマス計算が終わったら「いただきます」をするというようにいつも行う行動とセットにすると習慣は作りやすくなります。